入選

親切とお節介は裏腹？

香川県　香川大学教育学部附属高松中学校
２年　　田代力安

「ブシュー！」

電車の扉が開く。重そうなリュックを背負った高齢の女性が、入ってきた。僕が席を譲ろうか迷っていたとき、サラリーマンのお兄さんがサッと立ち、声をかけていた。

「良かったら、どうぞ。」席を譲ろうとしたそのとき、「私は結構。年寄り扱いは、お節介ですよ。」とピシャリ。「そんなつもりでは……、すいません。」と、お兄さんは別の車両に移動してしまった。「そりゃないよ」と、ぼくは思い、お兄さんが不憫（ふびん）に思えた。

別の日、混んでいた飲食店で、順番待ちの椅子で座っていたら、大きなお腹の妊婦さんが入ってきた。今度こそと思い、ぼくは席を立った。「良かったら、どうぞ。」マタニティマークをつけていたし、大丈夫だろうと思っていたら、「大丈夫ですよ。」と。「えっ？だって……。」と、マタニティマークを指差すと、「ああ……、どうも。」と。

何ともスッキリしない親切だと思ったが、一部始終を見ていた家族は、「えらかったよ。」とフォローしてくれた。親切とはどういうことだろう？ぼくが思い描いている親切と、みんなが考えている親切とは、違うのだろうか？小さい頃から、お年寄りや妊婦さん、小さい子どもを連れたご家族、困っているのではないかと思う方を見たら、できるだけ手助けをしなさいと言われ、育てられてきた。

悪いことをしているとは全然思わないが、ありがた迷惑だと思われていると思うと、気持ちが沈む。そんな話を、夕飯時に家族にしてみた。兄は、親切を受けない人の気持ちがわからない、と言う。お父さんは、良いことをしているのだから、胸を張ればいいんだよと言う。お母さんは、こう言った。

「力安は、誰のために親切をするの？」「誰のためって、そりゃ困っている人のためでしょ。」と言ってから、ぼくはハッとした。

「そうだよね。お母さんは、困っている方のお手伝いをするときに、自分のためにしたことはないの。だから、断られても、そのときには、必要なかったんだなと思うのよ。」と。

なるほどそうか。今までぼくは、どうしても周りの目が気になってしまい、ついつい断られたら恥ずかしいとか、ばつが悪いとか、そういうことばかりに囚われていた。親切とは、相手の状況を思ってすることであって、断ろうが、受けようが、その人の判断なのだ。断られても、そのときには必要なかったのだと思えば、一喜一憂せずに済む。少し気持ちが楽になった気がした。

ある風の強い日、１人で近所をジョギングしていたら、すれ違ったベビーカーを押す女性の帽子が飛ばされた。思いのほか風は強く、ずいぶん走ったが、ぼくは帽子を掴み、その女性に渡した。走り去ろうとすると、呼び止められ、何度も「ありがとう」とお礼を言われた。すごく嬉しくて、心がほかほかした。

親切は、ときにはお節介になってしまうかもしれないが、僕はチャレンジし続けていきたいと思った。